



# 子供讀書歌（一七）

倉

橋

惣

三

## 一六

孫

### 1 序曲

成田山新勝寺の大広間である。敷きつめられた坐蒲団に、ぎつちりと坐つている行儀のいい聴集は、いずれも小さきりさげや、霜おくびんの毛を、きれいに撫でつけた御隱居さん方である。いつものありがたいお説教ともがつて日本児童学会の秋季講演会といふのに、どういう學的興味を以て、次々の講演を拜聴しておわすのかと思われる年寄り講中連である。いましもその前に立つて、独逸語の児童心理キッズ・ラフを頭の中で和語に翻訳しながら講義をつゝけている若い講師の顔には、話が進むにつれて、当惑と恐縮との色がだん／＼濃くなつてゐる。自分のうちに祖母といふものさえもつていない此のホヤーの若父文學士のお話は、多分は少しづゝ遠くなつてゐる此の人々の耳に、どうはいつてゆくのであらうか。インテリ、アザースの会などで、『先生お子さんは』ときかれて、『実はまだ』と答えるほかない此の若い父の所謂チャイルドは、彼れのお話を傾(?)聴——ねねむりで首を傾けてもしているおばあさん方の心にある『子供』とは、実体性が大にちがう。先生の話も、空念仏といふ訳でないとしても、おばあさん達の可愛い孫までには、もう二代の間隔がある訳である。学会の今日の講師の中でも老先輩のお話は適切だが、彼としては、とんだ末席に加わらせられたことだと、しみじみ身の程を感じさせられた仕事であつた。

築地に海軍經理学校のあつた頃である。その出身者会で、どういう思ひつきからか、彼を招いて、児童教育の講

演を聴くことになつた。成田の時からみれば、大分年も経ていたし、先ず出された記念帳に

### さゝ舟の行くへやいづこ春の海

と、なぐり書く位の図々しさになつていて、聴く人はいづれもお老人方である。しかも、此の学校の出身者会だか、日やけした皺面の鼻下に八字鬚のいかめしい老督者もいる。よくまあ、がまんして彼の話を聞いて（聴いてと書かないのは、漢字制限のためばかりではない）おられたものだと思うが、話（さすがに短く切りあげたが）済んだ後の茶の時の、「いや、孫は可愛いもんでござして」とか、「孫も多くなるとうるそうて」とか、いう段になると、彼は全くまご／＼せざるを得なくなつた。「さようですかねえ」とも「えないから」、「一体幼児期というものは」と、おはこの『一体』で相槌をうつものゝ、実戦を経験せずして兵を語るに過ぎない。「實にまだ孫がありませんで」と、そんなことはことわる迄もなく先方によく分る筈である。彼に孫の心理と祖父の心理が分つていないのである。もう一つ、今でも分らないことは、なぜその会が、彼の話をきこうとしたかである。

## 2 五樂章『孫は子より可愛い』

昔の人は、なんでも比較表現をしたがる通俗癖がある。なぜ、孫も子も可愛さに差はない、あたりまえのことを言わないのか。

なるほど、息子にしても娘にしても、もう一人前に成人している。いくら甘い親の目からだつて、あどけないと何かわいらしくとかいう姿ではない。その分別顔には、親も少しは遠慮がいるし、時には逆に時代錯誤を批判されることがさえある。その点、確に孫と子との相違だが、だからといつて、孫と子との可愛さの差の理論は成り立たない。たゞ、子よりも孫の方に、現在の愛撫性を豊かであることゝ、父母よりも祖父母の心理に、眼前の嗜愛性が濃密であることゝの差があるだけである。そして、この事実からは、昔の諺にも穿つたところがあるとはいえる。

人間の愛情は、屢々相互の関係である。少くも、愛が受けとられるることは、愛を心に熟させる条件である。神の愛は知らないが、人間の愛は、それを受けとつて貰えるところに喜びがある。少くも愛する快感がある。人間でも、仁慈とか、恋慕とかいうたぐいのレリジヤスな場合、又これとまるきし別なロマンチックを場合は、終始全く相手の反応を求める愛が聖經に読まれたり、又怪しくも相手の反応に反比例する愛（？）が小説に弄ばれていたりする

が、凡庸平常の人間愛は、受けられての愛である。ところで、受愛性は誰れにでもあることであるが、心のすなおさに伴い、心のすなおさは無我の淡素をもとゝし、無我の淡素は児童性の特色である。この意味において、子供の受愛性は、愛せられることを求むると共に、愛せられ易いのであり、又、愛せられる喜びを現わすに率直である。愛を受くるにひねくれ、殊に受愛感を現わすにこじれ勝ちな有邪氣なおとなとはちがうのである。惜しみなく愛を与うることが、世に貴きことであるとかいわれるが、遠慮なく愛を受くることこそ世に最も愛すべきこと（同時に貴くもある）ではないか。子という生物も親という生物にメタモルフォーゼしてくると、必ずしもそういうくなるが、孫といふ生物は、如上の意味において、受愛性に最も富めるリットル、クリーチュアである。幼い子供が、おじいさんやおばあさんに、恥しげもなくあまつたれるのも、そのためである。又、憚りもなくだらをこねるのも。そこからである。従つて幼子のあまえもだゞも、愛の目には、たゞほゝえましく可愛らしい。この際の老人心理を更に拡大して分析すれば、よくもまあこんなに全幅の信頼感を以て、あまえて呉れるものだ、わがまゝを言つて呉れるものだと、先ずほゝえましく、いぢらしく、いとおしくなるのである。

次に、祖父母の心理に、眼前の嗜愛性が濃密だと前に言つたのは、寧ろ老人心理一般のことと、子供讃歌直接の問題外に出るが、とにかく、老人生活の心理的・社会的いろいろの条件から、小さいものを愛したいことも、小さいものに愛されたいことも（嗜愛性の両面）自分が若い親であつた時よりも多くなつてくるのである。その結果が往々にして、同じく昔からの諺通り、「年寄りの子は影なし」（年寄りに育てられた子は鍛錬されないから虚弱だということ）になるのを免れない。祖父母たるものゝ心しなくてはならぬところであるが。その甘さは辛過ぎる家庭の調味料になることもある。

### 3 『孫は目に入れても痛くない』

可愛い孫にはおじいさんおばあさんの目がないともいわれるが、これが、聊かおじいさんおばあさんの孫に対する盲目愛をも意味するとすれば、痛くないといふ方は、孫のことなら万事目ざわりにならない大目にとるを、うまく言つてゐるものであろう。一体、人間の目は、美を見る。醜を見出す。美を見て快とし、醜を見出して痛む。快を求め痛を避けたいのは人の常であるけれども、どうも欠点が目については、自分の目の鋭さに苦しむことが多く

て困る。寛容、悪を見のがせたら自らも楽しかろう。慈眼、悪をゆるせたら自らも幸福だろうにと思うのに、またしても、少さい埃を大きい染のように目に感じて自ら痛み苦しむ。批判の目、查察の目、審判の目が皆それである。白日澄徹の峻烈はあつても、春の夜のおぼろに包む自他の安慰はない。相手をも救わないし、自分も救われないのである。それは凡人の常であろうけれども、また老人心理の一つかもしれない、偏執、強情、自分勝手、ひとりよがり、人を見る目ばかり高くなり、狭くなり、他に和し、人に溶けることがむつかしくなる。他と共に和させて貰いたいくせに、彼に和せず、人の間に溶けさせて貰いたいくせに人に溶けず、親しまないから敬遠せられ、小うるさいから人にきらわれる。老人生活の孤独性とか寂寥性とかも、そこから起り、事毎に我れと我が目を痛めている。そのしばだよく目の前に立ち現われ、無痛療法をして呉れるのが孫である。開眼の仏光、洗眼の仙家のあらたかな偉力ではないが、抱きつかれよば抱かすにいられず、飛び込んでくれば目にも入れるを辞せない。

#### 4 トラブル 学説

成田時代、築地時代から年ふること長く、七人の孫もちになつて、彼は聊か孫の愛を解したと自称している。そして孫の讀美者を以て任じてもいる。しかし、しかしである。孫にとりかこまれる実際の生活には、孫礼讀ばかりではない点もある。そんなに無条件講和論でもないのである。

名古屋大学学長勝沼博士の、長壽のについての放送を聴いたことがある。医学の権威であり、旧知でもあるからあつたが、長壽という題に興味をもつといつところに、孫の歌の著者として争い難い問題がある。という人があるかも知れない。それはそうとして、その話の中で、博士が、孫のない人の長壽の実例を挙げたのが、彼の平素の孫の歌と食いちがうよう聞えて、勝沼君ともあろう人がと思つて、聞き耳をたてた。博士は孫の世話はなか／＼面倒なことで、老人には相当トラブルになることが多い。その人はそのトラブルがないために、気楽に長生きしたのだと言う。孫の歌の著者としては一応は反対せざるを得ない訳である。ところが、よく実際を省みてみると、此の学説に真理のあることも拒めない。實際孫にはトラブルが多い。ところで子のときには、そもそも感じなかつたトラブルを、孫のとき感ずるのは、老の養えのためが大きな原因とも思われるが、必ずしも、そればかりではないかも知れない。す

なわち、孫にはなんといつても直接の養育実務担当者と責任者が別に居る。祖父母が間接だといふ訳ではないが、トラブルと意識するところに、多少のすきまがあるからであろう。とすると、孫への愛が薄くも聞えるが、啄木の母を背負いての歌の口調をもちつて『戯れに孫を抱いてその余り重きを喜び三歩歩めり』と歌つたところで、叱られはすまい。しかし又、孫のトラブルは、老人のレクリエーションの通則に従つて、心身の過重負担にならぬ限り却つて長壽の生活法になると言つても、博士に叱られはすまい。此の歌の初めに、可愛さにおいて子と孫と差はないといつたが、子と孫との間に、今こゝで言つている最少差のあることは免れならぬ。と、同時に、適度のトラブルを負担しないおじいあんおばあさんには、孫のほんとうの味は分らないかもしれない。（といつて、そうでない人に理屈をいつてるのではない、歌は、分る人だけといつしよに歌えばいいものである。）

### 5 第五樂章『孫と遊ぶ』

『子をもつて知る親の恩』とかいう言葉を彼はあまり好まない。それはそうかも知れないとして、歌としては、『子をもつて知る子の恩』で沢山である。おなじように、孫の歌も、『孫をもつて知る孫の恩』で結ぶ外にない。若し、もう一行添えれば、『孫をもつて知る子の恩』だが、子がなくて孫を与えてくるものはない訛だから、更めて言わでものことであろう。

とにかく、子も孫も、心からの愛の対象になつてくれるものである。心から愛してくれるのが恩人なら、心から愛させてくれるものも恩人である。ひいまごのことまでは彼れに体験も実感もない。